

平成22年度卒業設計優秀作品の選定経過と講評

大阪市立大学工学部建築学科 卒業設計優秀作品選定委員会

2011年03月24日

1. はじめに

昨年度より、それまでの公開審査会ではなく、公開講評会として運営することに形式を変更した。それは、必ずしも入賞者を決めることだけが目的ではなく、教育的にも各作品に対して十分な議論と講評を尽くそうという趣旨である。そのため優秀作品候補として選出された全作品について学生がプレゼンテーションを行い、投票に加えて適宜質疑応答と講評を繰り返しながら審査委員の合議によって各賞を決定した。以下にその経過と講評をまとめておく。

2. 卒業設計優秀作品選定委員会

卒業設計優秀作品選定委員会は、学内および学外の下記8名の審査委員によって構成される。

＜ゲストクリティック＞	＜学内委員＞
松岡 恭子（建築家・東京電機大学准教授）	吉中 進（建築構造分野）
曾我部 昌史（建築家・神奈川大学教授）	梅宮 典子（建築環境工学分野）
＜卒業設計担当非常勤講師＞	宮本 佳明（建築デザイン分野）司会進行
山内 靖朗（建築家・藤の家建築設計事務所）	横山 俊佑（建築計画分野）
	徳尾野 徹（建築計画分野）

3. 選定の経過

優秀作品候補

まず本年度の特殊事情として、提出締切り時点での未提出者が全31名中13名にも及んだことが上げられる。未提出者13名の内12名については最終的に遅刻で作品を提出し、指導教員預かりとなった(合否については提出時点で保留とし、学科判定会議の判断に委ねられた)。

専任教員による学科判定会議において通常は10作品程度を優秀作品候補として選出するが、本年度は未提出多数のため対象となる作品数が18作品と少ないことを受けて、学科判定会議としては採点成績上位6作品までを優秀作品候補として選出した。その上で例外的措置として、追加の優秀作品候補の選出を遅刻提出作品も対象に含めてゲストクリティックの先生方に委ねることとした。結果的にコンセプトの明快さと表現の密度等を評価された4作品が公開講評会に追加で選出され、合計10作品が優秀作品候補として公開講評会に進むことになった。

プレゼンテーション

全10作品について順次、学生プレゼンテーションと質疑応答を行った。

第1回投票

10作品について審査委員一人あたり持ち票3で自由に投票を行い、最初に票の入らなかった2作品を優秀作品候補から外した。さらに1票を獲得した2作品については再度質疑応答を行い、優秀作品候補として残すこととした。

第2回投票

第1回投票で残った8作品について審査委員一人あたり持ち票2で投票を行った。その結果、有藤・藤本が各5票、芝本・友邊・瀬崎・廣瀬が各1～2票と明快な差がついたため、この時点で各委員に確認の上、前2者の優秀賞以上を確定し、後4者を佳作候補とすることとした。

第3回投票

佳作候補4作品の推薦理由について推薦した委員に再度説明を求めた。その上で、持ち票2で4作品に対して投票を行った。その結果、各2票にとどまった瀬崎と廣瀬については合議を行い、最終的には7票を獲得した芝本と5票を獲得した友邊の2作品を佳作と決定した。

第4回投票

有藤・藤本の2作品について、改めて各委員が適宜講評を行い、最優秀1点を絞り込むべく決選投票を行った。その結果、6票を獲得した藤本を最優秀賞、2票の有藤を優秀賞と決定した。

審査委員特別賞

ゲストクリティックの2名の先生方に、それぞれ独自に審査委員特別賞を選定してもらった。優秀作品候補の中から、瀬崎が松岡恭子賞、平田が曾我部昌史賞に選ばれた。

4. 優秀作品の講評

最優秀賞：藤本絵理「美術館裏小学校」

美術館と小学校をひとつの敷地に混在させて、両者のアクティビティの連鎖反応を起こすというコンセプトである。話を聞くうちに、普段からワークショップ等を通してアートと教育プログラムの馴染みの良さを実感していた建築家の間にじわりと共感が広がった。日生球場跡地という窪地状の敷地を選択したことも、新しい表現世界を提示するためには適切だったかもしれない。プレゼンも手堅い(但し、これは褒め言葉とは限らないが…)。3回生の時と較べると随分とセンスも良くなった(意外にも、センスとは学習によって獲得可能なものである!)。高い命中精度で実直に課題に取り組むことに加えて、今後はさらにより射程の長いproject(=投企)つまりはリスクーな作品にも挑戦することを望みたい。君なら出来ると思う。

優秀賞：有藤恵太「空中霊園」

模型の迫力では一等賞だった。おそらく、本来は滑らかな曲線であるはずの等高線をガギガギとデジタル処理したような表現が効果的であったのだと思う。と同時に、残念ながらそれが全てであったとも言える。せめて反り返ったスラブの下の使われ方がちゃんと説明出来れば良かったのだが。やはりしっかりとしたコンセプトワークと「機能」という当たり前の問題は、建築を設計していく上で大変重要です。最終的に建築家の票が1票も入らなかったことを噛みしめて今後の糧として下さい。

佳作：友邊愛由美「テーブルの使い方」

野心的なコンセプトである。いずれもが地面に対して平行な面を必須とするというただ一点から、スケールという問題を超越して家具～建築～土木構築物の類似性に切り込んでいる。大変興味深く「構築」に関わる根本的な問題提起だと思う。ただし「大変興味深い」ということは「誰も考えつかなかったくらい突飛である」ということでもあり、つまりは「一般には理解し難い」という危険と背中合わせだ。だから、もう少し審査委員に分かりやすいプレゼンを展開すべきでしたね。君は改めて学校で設計の勉強を続けるのがよいように思います。

佳作：芝本崇哉「AXIS」

JRの電車車庫の廃線跡に計画された医療施設のオルタナティブの提案である。周辺環境をよく読み込んでおり、敷地選定とプログラムの間にはある必然性が感じられた。ただそのコンセプトを浮き彫りにする必要にして十分なプレゼンを展開出来なかったことが悔やまれる(不必要な一方で不十分だった)。きちっとは出来ていたのに票が伸び切らなかった原因はそこにあると思います。まずは捨象ということを学んで下さい。

5. 総評

「卒業設計とは、これから始まる『建築人生』へのマニフェストである。ここで大風呂敷を広げずして、一体どこで広げるのか!」

これは、昨年のこの総評で学生をアジテートした文章の一部です。その甲斐があったのかどうか定かではありませんが、卒業設計に臨むにあたっての器が「小さい」のではないのか? という積年の課題は少し改善しつつあるように見受けられました。

もう一息だと思います。がんばれ

(文責：宮本佳明)